

の不足をいくらか補って、それぞれ意見として以下に載せられている。

提題

精神の自覚の三一的構造

片 柳 栄 一

アウグスティヌスは *De trinitate* 第八巻以降において、これまでより内的な仕方
で神の三一性を理解しようとする。人間の精神の三一性のうちに *imago Dei* を認
め、これを通して神の三一性を垣間みようとする。しかしこのことは単に、不完全
な形象から、完全な形を類推するというにとどまらない。アウグスティヌスが人間
の精神を *imago Dei* と呼んだ時、そこにどのような深い意味がこめられていたか
を示す *De trinitate* の一つの箇所を示しておきたい。彼はその十四巻の後半で、使
徒行伝十七章の有名な言葉「我々は神のうちに生き、動き、存在している」を引用
して、我々が神のうちにある在り方は二つ考えられるという。一つは物体に従って
secundum corpus のものであり、我々がこの物的世界のうちにあるということが
すでに神のうちにあると考えられるという。しかしもう一つの仕方は、精神に従っ
て *secundum mentem* のものであり、より優れた、見えざる、叡知的な仕方
で、我々は神のうちに生き、動き、存在しているという。アウグスティヌスによれば、全
ての事物、全ての被造物が、同じ仕方
で、神と共にあるのではないという。引用す
ると「人間が神に対して『私は常にあなたと共に在ります』と言うのと同じ仕方
で、全ての事物が神と共に在るのではない。また神御自身、我々が『主は我々と共
に在す』と言うのと同じ仕方
で、全てのものと共に在すのではない。それ故、その
方なしには在りえないその方と共におらない時の人間の悲惨は甚だしいものであ
る」(14・12・15)。

アウグスティヌスによれば、全ての事物は、神のうちに在る、或いは神と共に在
る。しかしその共にある在り方は同じではない。人間に特有の、他にまさった在り
方において神のうちに在り、神と共に在る在り方が、精神に従って *secundum men-*
tem のものであり、この人間独自の在り方を探ることが、アウグスティヌスにと
って *imago Dei* を探ることなのであり、それはまた、他の事物とは異った形の、

神と共に在る在り方の探究なのである。そのような独自の在り方をもった人間存在の本性の探究が、*imago Dei* の探究であり、そのような人間存在論の試みであると言えよう。そしてさらにそうした試みが、同時に、人間が神と共に在る在り方の探究であるという意味で、人間存在の根底において常に現臨し、触れたもうている神そのものの探究であり、人間が神に出会う場、或いはすでに常に出会われている場そのものの探究なのである。

〔1〕 探究の場——愛の三肢構造

アウグスティヌスが *De trinitate* 第八巻で *imago Dei* としての人間の精神の三一的構造の発見の手掛りとするのは、愛のうちにある三肢構造である。彼によれば人が愛する時、そこに三つのものがある。愛する主体 *amans* と愛される対象 *quod amatur* と愛 *amor* とである。この分析で特徴的なのは、愛するもの、愛されるものに並んで、第三のものとして愛が特別に取り出されていることである。彼によれば、我々が或るものを愛する時、我々は単に愛の対象にのみ関わっているのではなく、そのような対象を愛することそのものをも愛している。もちろん対象から切り離されて、愛のみ愛するということはいえぬ。対象を愛することによって、同時にそのような愛をも愛するのであるが、この二つははっきり区別されねばならない。そして我々は、愛の対象よりも、対象への自らの愛をよりよく知っており、より身近に愛はあるという。我々が対象への愛において同時に関わっている愛への愛、そこでなされている或る根源的関わり、それこそが、自己への関わり、自己への愛であるが、単にそれに尽きるのではなく、アウグスティヌスにとっては、この愛への関わりは、自己への関わりをも越えて、さらに神への関わりでもある。何故なら神こそが愛そのものであり、愛の根源だからである。彼にとって神は、他の事物のように単に愛の対象にすぎないのではない。事物、隣人、自己を愛するその愛において、その愛の原型、根拠として神は現臨したもうのである。我々が如何なる愛を愛しているかに従って、神は我々の間近にもあり、また最も遠く離れてもいたもうのである。このように愛、意志というものは、自己をも越えてゆく超越的構造をもっている。アウグスティヌスは、このように独得の構造をもった愛の三肢構造を、「そこで探究がなされる場」(8・10・14) であるという。アウグスティヌスに

とて愛とは、単に記憶、知解の後に付加されて、三一構造を完成する最後のものではない。そうではなく、この愛の三肢構造が、或いは愛の場がさらに具体化されてゆく中で、*imago Dei* としての精神の三一的構造があらわとなってゆくのである。

〔2〕 精神の自覚の構造

アウグスティヌスが *imago Dei* を考えるのは、愛の三肢構造が自己に向けられる場合である。精神が他のものでなく、自己を愛する場合である。この場合は、愛の主体と対象は一つである。するとここでは愛の三肢構造でなく、二肢しかない如くである。ここでアウグスティヌスは、愛のうちに本質的に含まれる知を取り出す。誰も知らないものを愛することはできないからであり、愛は何らかの知を含み、その知に促がされているからである。精神が自己を愛する時、そこでは何らかの意味で自己が知られている。こうして精神が自己を愛する時、精神・自知・自愛の三つがあることになる。そしてこの三つは、三つでありながら、しかも一つであり、ここに三一的構造が見い出される。しかしこの三一的構造は未だ不十分である。まず第一の精神は他の二つに対し優位的であり、他の二つに対して真に相関的であるとは言えない。そこでこれは相関的な自己の記憶 *memoria sui* にかえられる。また愛は終極的な享受を示すものであり、自己が明らかでなく、探究する精神には適わしくない。それ故愛よりより広義の意志にかえられる。しかし最も問題なのは自知そのものの本性である。愛という精神の場における知が如何なるものであるのか、これが *De trinitate* の第十巻から第十四巻までの基本テーマである。

第十巻で問題とされるのは、自己を知らず知ろうと求めている精神である。この精神が如何なる状態にあるのかを分析してゆくアウグスティヌスの導きの糸となるのは、人はまったく知らないものを愛することはできず、知らないものを求めるという場合も、何らかの知が促がしとなって探究を導いているという原則である。自己を知らずして求めるという場合、それではどのような知がすでにあると言えるのであろうか。様々の例を用いての探究の後にアウグスティヌスが見出した事実は、知らないものを求める時にすでに前提される一般的な知にも先立って、自らについての知が現前しているということであり、あらゆる知に解い、それと同時に自

知があるということである。自己を知らず求めているという中で知られてくる自らの知、そのような知が精神の自知であり、彼はこのような自知のうちに、他に見られぬ或る独得の知の形態を見ている。彼はこうした自己の知こそ、精神そのものの本性であるという。人が精神を火と言い、或いは空気であると言う時、その人は、精神、或いは自己がそのようなものであると想いなす *putare* ののであるが、精神の本性は知解することであると人が言う時、それは *putare* でなく *scire* なのである。つまり自らの本性が火や空気であるというのは憶測にすぎないが、自らが知解する者であると知るとは、何の媒介も要せぬ直接明瞭で透明な知であり、彼は、こうした知そのものが精神の本性であり、精神の場であると考えるのである。

そしてこうした根源的な精神の自知は決して時には知り、また他の時には知らないでいるといった偶然的なものではない。精神はその根源において常に自己を知っている。アウグスティヌスの以後の探究は、潜在的な自知 *se nosse* と顕在的な自知 *se cogitare* の関係に向けられる。彼にとっては、デカルトのように *cogito* において始めて自己が自覚されるのではない。*cogito* によって自己を自覚する時、自己を再認 *recognoscere* するのであり、自己が常に自らに知られていたことを発見するのである。*cogito* によってこれまでなかった新しい知が生じるのではなく、すでにあり続けた自知が *cogito* の明るみにもたらされるのである。

しかしアウグスティヌスにとって単に精神が自己を知り愛するだけでは未だ *imago Dei* であるとは言えない。こうした精神が神の知恵に与かるのでなければ真の *imago Dei* であるとは言えないのである。しかし人間は墮罪によってそのような知恵に与かる能力を失っているのではないか。それに対して彼は答える。人間の墮罪にもかかわらず知恵への参与としての *imago Dei* は人間のうちに存していると。何故なら神は、神を忘れきった人間の心の奥底においても常に触れていたもうからである。「神より最も離反している時にも、何らかの仕方では人が触れられている光に身を向けかえす如く、人は主に身を向けかえす」(14・15・21) のであるという。アウグスティヌスが *De trinitate* の八巻以降でくりかえし語っているのは、人間の精神の根底で、いかなる時にも触れている或る永遠的な光の経験である。それは、内なる我々のもとに *intus apud nos* (8・9・12) 現臨しているという。精神の三一構造の自覚の場は、神の永遠の光が、人間の離反にもかかわらず、常にその根底

において触れ、暗がりやさし貫いている明るみの場であり、そのような *intus apud nos* としての精神の自覚の場をあらわにすることが、アウグスティヌスにとって *imago Dei* の探究であったと言える。

提題 自己認識の場をめぐる

谷 隆 一 郎

神の似姿 *imago Dei* というのは、不思議な郷愁を誘う言葉である。それは『創世記』の周知の箇所によれば (*Gen.*, 1, 27), 人間が「それに即して造られた所のもの」であり、人間が人間たる限り有すべき本然の姿を指し示していると考えられよう。

しかし、我々は神の似姿を何処で認め、それとして知ることか。たしかに、我々は誰しも自分が人間たることを何らかし了解しており、従って又、神の似姿は我々にとって他の何ものにも増して現前しているはずであるのに、我々の現に在る姿、日常的な生き様の全てが、そのまま神の似姿を表現しているとは言い難い。ここに瞥見される或る種の緊張は、我々が「神の似姿に即して造られたこと」と、「そのことをしも知ること」との、延ては又、「神の似姿で在ること」と、「神の似姿に成ること」との微妙な差異に根差すものであろう。恐らく、神の似姿を知ることとは、それを知る者の存在様式の何らかの変容を解わずにはいないのであり、この意味において、神の似姿を知ることとは神の似姿の再形成 *renovatio* の問題に、言わば位相をずらせて問われざるをえなかった。

I. こうしたことは自己知らないし自己認識 *se cogitare* の構造の基本線を暗示しているが、それは差し当り次の三つの契機を有する。すなわち、(1) 人間は本来、神の似姿に即して造られたこと、(2) アダムのいわゆる原罪によって人間の本性に何らかのデフォルメが生じたこと、(3) 神の似姿は「それが刻印されてきた根源に還ることなしには保持されぬこと」(*De Trinitate*, II, xi, 16. 以下、同書からの引用は書名を略す)の三点である。この場合、(1), (2)は神話的表象を含むだけに、却って、そこでは因果関係の連続性が断たれていると看做されよう。つまり、上の